

# アーティストのいる児童養護施設 I

Artists in children's nursing homes I

藤井 達矢

FUJII Tatsuya

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第3号 2018年

藤井達矢\*

FUJII, Tatsuya\*

キーワード：児童養護施設 美術 アーティスト

## 1. はじめに

筆者はアートを紹介して地域社会そして子どもたちと関わる活動を続けてきた。教育や保育における芸術表現の枠を出た、人の暮らしに密着した場でのアートの意義を模索してきたが、その成果をどのように測るべきか、どう評価すべきか、地域アートの在り方が問われる今、改めて検証を試みたい。

一方、従来の教育・保育の現場に芸術家が入り込み、教育者・保育者と共に議論しながら進めるという取り組みは、香川県高松市の芸術士派遣事業を筆頭に始まっているが、筆者が関わる西宮市山口町船坂でも芸術祭を機に、同地区の児童養護施設に芸術家が入り込んで 9 年になる。教育の場、保育の場、生活の場でもあるこの施設で、アートがどのような効果をもたらすのか、芸術家自身も職員自身も今は行動することのみで手一杯で、客観的な整理が追い付いていない現状といえる。船坂とのアートを紹介した関わりをライフワークと考えている筆者は、地域に根差した様々な文脈を踏まえながら、この施設にアーティストがいる意味を明らかにすべく、その研究の下準備として研究報告にまとめた。芸術表現の効果についての実践研究は、医療分野の芸術療法が先行している。民間の資格である芸術療法士・音楽療法士・臨床美術士の他、各種アートセラピストが、児童養護施設に入り始めてもいる。そこで用いられる検査法の一つを援用し、芸術表現の効果を確認する。

## 2. 善照学園とアーティスト

### 1) きっかけ

善照学園は兵庫県西宮市北部の山里、山口町船坂にあつて、真宗大谷派善照寺を母体とする児童養護施設である。施設長の松本義博氏は、善照寺住職を務めている。養育理念として「人の痛みが分かり、人の幸せを願う人間を育てる」を掲げ、船坂地区との連携も密に行いながら養育を行っている。本体施設に 69 名、小規模分園として 2 カ所のグループホームに各 6 名、計 81 名を受け入れ、職員は 22 名である。本体施設とは別に、船坂地域内に借りた一軒家では幼児 6 名が生活しており、山口町香花園のグループホームでは小・中・高の男子 6 名が暮らす。子どもの自立・発達・自己実現を目指し、より一般の家庭に近づけた小規模な生活環境を意識した仕組みだが、学園自体もそうした形態に変わってきた。以前は同年代の子どもによる集団行動が原則で、大部屋での共同生活だった。しかし現在は、幼児を除いて各自が部屋を持ち、担当職員のもとで共同生活している。

学園に現代美術家を通うようになったのは、2009 年のことである。そのきっかけとなったのが、芸術祭『西宮船坂ビエンナーレ』（船坂里山芸術祭推進委員会主催）である。2009 年のプレ開催から 2010、2012、2014、2016 年の計 5 回、この里山船坂を舞台に開催されてきた。その端緒は西宮市内でも唯一現役だった木造校舎の船坂小学校の閉校と重なる。少子高齢化の波に逆らうことはできな

\* 教育学科准教授

ったのだ。閉校時の児童数 40 数名中ほとんどが善照学園の子どもたちという現状に、船坂の住民も山口小学校への集約を受け入れざるを得なかった。それは、本来の地域の子どもたちも、学園の子どもたちも、皆船坂の大切な子どもだという思い、つまり児童数の多い中で揉まれながら学ぶことが必要だという判断に他ならない。さらに農業の後継者はおらず、都市に生活基盤を築いた若者は戻ることもできず、古き良きコミュニティーの維持が困難になりつつあった。日本の地方のどこもが抱える問題の縮図が、この西宮市内の小さな集落にも現れていたのだが、筆者は「アートを手掛かりにその流れを変えられないか」「アートが新たなコミュニティーを構築する脈動になるのではないか」という問いかけを、船坂に行ったのである。経緯は省略するが地域住民主導の芸術祭はすぐに注目を集めることになった。筆者は総合ディレクターを 2014 年まで務め、2016 年は推進委員全員がディレクターとして、完全に地域住民のみで芸術祭を敢行したのである。現在はこれまでの振り返りと、船坂とアートの関係性を改めて皆で考えるという段階であり、2018 年のアウトプットの有無を含めて検討しているということである。

このいわゆる地域おこしの芸術祭『西宮船坂ビエンナーレ』に、立ち上げ段階から手弁当で参加したアーティストの一人が、善照学園に継続して通い 9 年目となる。その人は、鈴木貴博という現代美術家で、現在は本学共通教育部で非常勤講師も務めている。鈴木は「生きろプロジェクト」と題して、世界各地で「生きろ」という文字を修験者のごとくひたすら描き、また来場者にも「生きろ」と描かせるという活動で注目されていた。2009 年にその展開の場として、善照寺本堂を使うこととなった。住職でありビエンナーレ実行委員長でもあった松本学園長と鈴木は、ワークショップや展示についてやり取りを重ねた。僧侶としても養育者としても鈴木のプロジェットの主旨に大いに共感した松本氏は遂に、学園での継続的な指導を鈴木に依頼したということなのである。

## 2) インタビューから

現代美術家鈴木貴博と松本義博学園長に簡単な聞き取りを行った。特に小学生の児童を対象に造形活動を展開してきた 9 年間の振り返り、その意義と今後の展望についても話を伺った。

鈴木が学園に通うようになったきっかけは先に述べたが、2009 年のビエンナーレの展示会期終了を待たずに、学園での活動は始まっている。それ以前には余暇の表現として音楽の活動を続けていたが、その方が来ることができなくなって久しく、どうしたものかと苦慮していたところ、ビエンナーレで鈴木との出会いがあり、「この人なら」という確信を持って依頼したと学園長は語った。背景に様々なものを背負って入園してくる子どもたちが表現活動を通して癒しを得たり、自尊心の回復など、経験上その効果を認識していた学園長は、できるだけ早く空白を埋めたかったという。しかし決して見切り発車ではなく、鈴木との議論を重ねた上での確かな決断だった。

活動の頻度は月に 2 回で各回 1 時間半～2 時間程度。特に曜日や時限が固定されているわけではなく、学園行事などのスケジュールと鈴木のスケジュールを照らし合わせて協議の上で実施している。あくまでも生活の場での余暇活動であって、興味のある児童が毎回自由に参加する。開始当初はまず初めに希望者を募り、申し込んだ児童のみに固定しての活動だったが、現在は完全に自由参加としている。とはいえ、固定せずとも顔を見せるメンバーはほぼ決まっているとのことだ。学園側の体制は、鈴木との連絡調整役として活動補助として 1 名の職員が担当している。2009 年から引き継がれて、現在は 4 人目の担当職員である。ただし繁忙時には、活動時間であっても補助につけないこともあって、鈴木が一人で行うこともある。そして学園側からこの活動内容について、特に要望や指示などは行われぬ。学園長としては鈴木に全幅の信頼を寄せ、全てを任せているという。こう聞くと、何か無責任にも感じられるかも知れないが、鈴木はこの体制が現状では「ベスト・バランスだ」

という。細かな齟齬は多々あってそれを埋める労力も必要とはなるが、絶対的に職員の負担が大きい児童養護施設であるということ、すぐに人間的な問題解消も見込めないことなどに理解を示しつつ、それでも少しずつ職員そして学園を取り巻く空気も変わってきていると感じるという。そこには、児童と向き合う鈴木の本心を見取ることができる。

鈴木は善照学園の他に絵画教室での指導や本学の非常勤講師（現在共通教育部所属。かつて教育学科で「教科図画工作」等を担当した経験もある。）も務めている。いずれも形あるものを作り出すということ、そこに指導者として介在するという点には違いはないのだが、善照学園ではそうしたことは全く違う次元での視点や技術、もっと言えば強固な「気骨」めいたものさえも必須となってくるという。それは鈴木がアーティストとして問題を抱えた児童と対峙しながら会得してきたものであり、経験に裏打ちされた方法論である。鈴木がポリシーとして挙げるのは、まず第一に「児童と一人の人間対人間として本気でぶつかる」ことである。他には「児童の社会を壊さない」「その子のお宅に入り込んでいるイメージで活動」「同じ内容の制作は 2 度と行わない」「極力ストレスをかけずに楽しくできることを心掛ける」といった言葉が出てきた。つまり、信頼関係をしっかりと構築するところから始め、良い作品を仕上げるための技術を教えたりするのではなく、表現活動をする時間と場こそが大切であり、将来自立したときにふと「学園で鈴木とかいうアートのおっさんと色々作ったよな。作ったまゝあてゲームでめっちゃ遊んだな」と思い出してもらえるような、子どもの学園での生活の一コマとして印象に残ってほしいという。それが長い目で見て生きる力になっていくはずだと。その意味では、現在本学で鈴木が担当する「自己発見アート」と通じる部分がある。アートセラピー的な要素も織り込みながら学生が自分自身を見つめ、思考し、アートを介して社会を生き抜く力を身に付ける内容であると筆者は捉えている。大学の授業であり、表現だけではなく大人の言葉としての知見も交えて学んでいくのだが、児童養護施設の善照学園ではこれをひたすら心のままの表現活動に集約しているといえよう。

それではこうした学園での活動によって、どのような成果がもたらされたのだろうか。2009 年に初めてこれを経験した児童はすでに学園を巣立ち、大学生の年頃である。学園でのアートを思い出すこともあるのだろうか。未だ具体的に数値として評価しにくい、「成果」というよりも短期的な「効果」を確認する術があり、先行する研究でその有効性が確認されてはいる。これについては後に述べる。

何ら測定も経ていないので客観性に欠ける点は否めないが、学園長によれば、この活動が始まってから子どもたちがのびのびと絵を描くことができるようになり、普段の生活にも落ち着きが生まれ、情緒が安定し、他の子どもたちとの関係性も非常に良くなっているようなことが見られるという。また鈴木も、かつては「荒れた子ども」「疲れた職員」というイメージが先行したが、例えば攻撃的で鈴木ともよくぶつかっていた児童が後に年下の児童の面倒を見るようになったなど、そうしたことを体感しているという。もちろんアートだけの成果ではないだろうが、学園職員や地域社会による養育の中に組み込まれたアートが、その成果を近づける一助になっていると考えられる。

今後の展望について鈴木は「まずは子どもたちと真摯に向き合い続けることに専心するべきであり、特にプロジェクトの発展や学園体制の拡充などは望んでいない」と述べている。一方学園長は「できれば保育士資格を持ち、アートを率先して取り組んでくれる職員を採用し育てたいところだが、なかなか難しい。鈴木先生の活動が職員の学びにもなっている側面がある。職員一丸となってスキルアップを目指したい」とのことであった。児童養護施設において表現活動に注力しそれを謳う先例はいくつかあるが、芸術祭を機に出会いが生まれ、そろそろ 10 年目を迎えようという船坂善照学

園。この取り組みが将来どのような実を結ぶのか、注意深く見守りながら、筆者もできる限りのサポートを行いたいと考えている。

### 3) 作品展

善照学園での造形活動の結果生み出された作品は、絵画展への応募に加え、地域内にある JA 兵庫六甲船坂出張所内のふれあい会館で発表される。大型の共同作品もあって、鈴木と子どもたちの活動の痕跡がそこにはある。このふれあい会館での展覧会は、単体として行われているものではなく、「船坂文芸サークル」という船坂に住まう方々が趣味の創作物を発表するシリーズの一環として、「善照学園絵画部」チームの展覧会という位置付けである（図 1）。他の展示期間には、「船坂陶芸クラブ」（講師転居のため現在休部）の展示や書、油彩、水彩、絵手紙、木工など多岐にわたる。この船坂文芸サークル展は 2011 年から開かれており、ここに紹介する善照学園の展覧会を以って 47 回を数える。ビエンナーレという現代美術の芸術祭開催に触発された地域住民が発表の場を持ちたいと動き、JA 兵庫六甲船坂出張所のご厚意を得て始まったものである。この仕組みに善照学園が組み込まれていることから、この施設の地域とのつながりの深さがわかる。

ビエンナーレ自体は秋の約一カ月間を会期に開催される祭であり、内外からの来場客 2 万人程度が訪れる。その間を終えてしまうと表面上は潮が引くように日常に戻るわけだが、人々の暮らしに根差した身近なアートとしてその脈動は続いている。ビエンナーレで見られるハイ・アートと、それに呼応した庶民のアートとでも言えようが、地域社会とアートの関係性が問われている昨今、こうした小さくも力強い活動が続けられてきたことに、ビエンナーレのひとつの成果を思うところである。その中でも一際精彩を放っているのが、善照学園の子どもたちの作品展なのである（表 1）。制作に励んでいる過程が大切であることは言うまでもないが、この展覧会で広く作品が公開されることには、子どもたちの承認欲求が満たされていくという意味もある。もちろん、個々の作品に氏名キャプションが付されることはないのだが。さらに言えば、船坂文芸サークルの一員であるということ、そしてこの展覧会が地域の人々とつながる場でもあることは、将来自立して社会の中で生きることへの第一歩にもなろう。なお、展覧会期終了までに撤去、または最良の状態を保っていなかった作品 2 点について、鈴木の撮影による写真の提供を受けた（図 2、図 3）。

船坂文芸サークル  
第 47 回 趣味の作品展  
善照学園 絵画部



図 1 展覧会キャプション

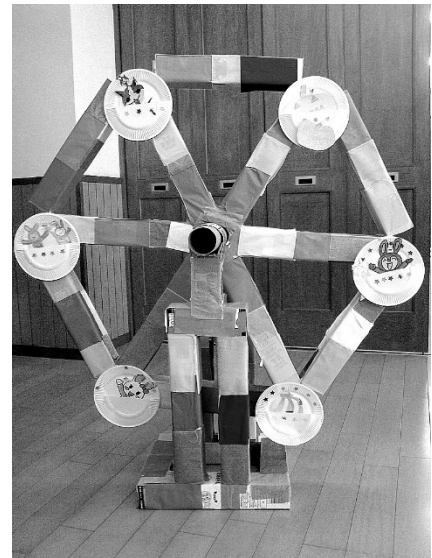


図 2 ポリ袋の巨人（施設内で撮影）

図 3 観覧車（施設内で撮影）

表1 展示作品 (2017年9月)

	<p>コラージュで作った家</p>		<p>まとあてゲーム</p>
	<p>ティッシュボックスとラップを使ったステンドグラス</p>		<p>クリスマスカード</p>
	<p>牛乳パックで作った懸垂人形</p>		<p>共同制作：ポリ袋の巨人（施設内では空気を入れて膨らませて遊んだ）</p>
	<p>トイレットペーパーの芯のレーシングカー</p>		<p>共同制作：絵の具遊び</p>

※大型共同作品の観覧車（図3）は、高湿度の影響で壊れたために会期前半で撤去されていた。

### 3. 児童養護施設とアート

芸術表現活動を特に意識的に活用している児童養護施設は、全国にいくつかある。例を挙げれば、子供の家（東京清瀬）、子供の町（埼玉春日部）、岸和田学園（大阪岸和田）、あおぞら（大阪岸和田）、錦華学院（東京練馬）、野の花の家（千葉木更津）、鎌倉児童ホーム（神奈川鎌倉）、筑波愛児園（茨城つくば）、大和育成園（奈良宇陀）、心泉学園（神奈川中郡）、一宮学園（千葉長生）など、アートの活用度の差はみられるものの、何らかの形で取り入れてそれを公表している施設である。善照学園は特にウェブサイトで公表してはいないが、似たような現状の施設も多数存在するだろう。そうした活動を古くから取り入れ、柱としてきた施設が愛媛県今治市の社会福祉法人コイノニア協会あすなる学園である。

あすなる学園の原点は昭和20年（1945年）に遡るが、松山信望愛の家からの分園としてあすなる学園が設立されたのは昭和31年（1956年）。その後移転を経て、いよいよ詩作や絵画の表現に取り組み始めたのが、昭和50年（1975年）のことである。キリスト教の精神に立脚した施設であり、この年に就任した園長が重点指導目標として「個性の伸長を第一に捉えて、個々の創造性の陶冶を重視した創造教育」<sup>①</sup>を掲げた。詩作・絵画を通じた表現教育を実施し、それで得られた成果や作品を「あすなる通信」の発行や展覧会活動へと展開していった。その精神は今も受け継がれ、実に43年目となる。その成果は著書にも纏められており、その歴史を振り返ることができる。

あすなろ学園における創造教育の位置づけは、余暇活動としての文化活動である。これは善照学園のそれと同様である。

「読書、詩作をより薦め、文化に触れ、互いに心を通わせると共に、児童の表現力、豊かな人間性を養う。また、指導者を招いて、四季折々のテーマ、自然等を題材として絵画にも取組み、季節を感じ、自然に触れ、児童の豊かな表現力、創造力を引き出す」<sup>②</sup>

これが、創立 50 周年を記念して出版された『冬のすずめたち』（2005）に記された重点目標である。当時の徳永弥生園長は詩人徳永民平でもあった。そして石川猛指導員（現パコダ幼稚園園長）、さらに妹尾みさほ主任保育士が中心となってこの創造表現教育を推進することになった。詩作については石川指導員と徳永園長が、絵画については地域ゆかりの画家と妹尾保育士があたっていた。その詳細が創立 30 周年記念詩集『あすなろの風たち』（1986）に記されているが、石川指導員による実践記録が、第五回松島賞（全国児童養護施設協議会）を受賞している。

実践者としての石川指導員そして妹尾保育士の言葉から、表現活動の骨子をまとめてみる。何らかの媒介を通して行われる「自己表現」とは受容の欲求と自己実現の欲求に他ならない。教育や養護は、子どもの健全な成長発達を見守る大人として、こうした基本的欲求を把握し、人格の形成や人間性の陶冶に主眼を置いた自己の確立を目指して展開されるべきである。その時に「自己表現」に着目することで、教育や養護は全うできる。芸術は教育に貢献し得る最良の手段であり、詩作は子どもを復活させる術である。また子どもたちの感覚は、それが解放されている時、思うことと行動とが一緒になって絵画として表現される。絵画という客観化された作品を通して自分自身を周辺に見せること、その時に生じる他者との関わりから学び、自身を深めていく。命を育み育てるという養護施設での絵画や詩作は、子どもたちの日常生活の中でのすべての面での応用につながる。

このように長い実践の中でその意義を見出してきたといえるが、妹尾保育士は「絵画が子供たち一人一人に、どのような形で受けとめられているかということ」<sup>③</sup>を課題として考えていきたいとも述べている。やはり芸術表現を媒介としているために、その成果を客観的に測ることが難しいのである。

#### 4. J-POMS 短縮版による表現活動の評価

##### 1) はじめに

心理療法としてコラージュ療法が施行されるようになって約 30 年が経過し、派生する様々な活用方法も確立され、その治療効果などが多数報告されている（近喰 2000, 塚本 2007）。これらは「心理療法」の側面から分析されたものではあるが、教育の場、養育の場における美術表現活動による短期的な効果として見逃すわけにはいかない。中には児童養護施設での児童のコラージュ表現と児童の問題行動との関係性を検討したものもあり（高畑・金丸,2011）、まずはコラージュ表現の前後で人ほどのような影響を受けるのか、コラージュ表現を美術表現活動全般に置き換えて、再度確認することとした。

##### 2) 対象と方法

対象は、本学短期大学部幼児教育学科（取得免許資格：幼稚園教諭・保育士）2 年生の女子学生 4 名で、1 名が 20 歳、他 3 名は 19 歳であった。「感性を育む造形表現の展開」の授業の 2 回目に実施した。個人情報扱いや倫理上の説明を十分に行い、理解を得た上で行った。実施日時は 2017 年 9

月 14 日 (木) の第 1 時限 (9:00~10:30) であった。実施後には調査結果を用いて授業の一環として検討する旨の説明を行った。

方法としては、初回授業時に、次回の持参物を次のように指示した。はさみ・のり・自分の好きな雑誌 1 冊の他に、新聞折込広告やパンフレットなど好きな絵柄があるものを適宜・自分の好きなネット上の画像を印刷したものなどである。この時点で学生たちは絵画技法としてのコラージュを行うことに気付くので、あえて伏せることをしなかった。

コラージュ表現前後に行う心理テストとして、J-POMS 短縮版を用意した。65 問では負担が大きいと見え、30 問でも十分に評価し得る短縮版を用いた。POMS は、気分を評価する質問紙法の一つとして米国で生まれ、日本語版 J-POMS とされたものである。対象者がおかれた条件により変化する一時的な気分、感情の状態を測定できるもので、医療のみならず看護・福祉・教育・スポーツ医学などあらゆる分野での応用実績がある。「緊張-不安 (Tension-Anxiety)」「抑うつ-落込み (Depression-Dejection)」「怒り-敵意 (Anger-Hostility)」「活気 (Vigor)」「疲労 (Fatigue)」「混乱 (Confusion)」の 6 つの気分尺度を同時に評価することができる。

コラージュの台紙として八つ切り (27×38cm) 画用紙を与え、横位置・縦位置どちら向きで使用しても良いこととした。また、本人持参の素材以外にも古新聞・古雑誌を若干用意して、それらから切り抜いて使ってもよいこととした。

まず初めに簡単に説明を行い、5 分間程度で J-POMS への記入が終わり、回収した。次に画用紙を配り、コラージュ表現を行ってもらった。およそ 45 分程度の制作時間であった。制作中には友人との談笑や意見交換も自由に行ってよいこととし、作品として点数化することは決してないことを念押ししつつ筆者はコラージュについて一切声かけをしないようにした。切って貼るというコラージュのみを原則としていたが、途中「貼らずに描き加えたい部分がある」という申し出があり、あえてその希望を制限せずに描かせた。本人が納得できるところまでで完成として、提出させた。最後に改めて J-POMS に記入させ、回収した。コラージュ表現前のテストでは、今現在を含む過去一週間の気分について回答し、後のテストでは、コラージュ表現を完了して以降の気分について回答させた。

### 3) 結果と考察

4 名ともに筆者が担任を務める学生であり、緊張を強いる要素はないといえる。しかし、数日後から幼稚園教育実習を控えており、また一方で採用試験対策に余念がないなど、ストレスは多いと考えられた。さらに朝一番の授業でもあり、このことも少なからず影響を与えていよう。制作中にはできるだけ自由にさせたが、互いに「かわいい」「サマになってるやん」などと感想を述べあったり、教育実習への不安が話題になると「いやいやよ〜♪」と合唱にまで発展していた。制止すべきか迷いもあったが、コラージュ表現そのものは順調に進んでおり、各々が自分の思いを素直に表現出来ている様子だったのでそのまま見守った。そうした制作過程でのコミュニケーションも、教育そして養育の場で大いに機能するものであって、それが数値として表れてもいると思われる。

学生 4 名の気分変化を T 得点算出によって表した (図 4, 表 2)。学生 D のみが他に比べて山形の特異な形となっている。この学生は、20 分以上遅刻して教室に入ってきた。通常であれば遅刻していることへの焦りなどが数値に反映されて然るべきであるが、この学生のキャラクターや授業者が担任であるという安心感からであろうか、緊張-不安 (T-A) が元々低い。心に余裕をもって入室したと考えられる。さらに、他の学生に比べて活気 (V) が突出して高い。つまり元気いっぱい不安もなく悠々と登学した、ということである。学生 A,B,C は形の差こそあれ、概ね似通った結果を示している。概していえることは、緊張-不安 (T-A)、抑うつ-落込み (D)、疲労 (F)、混乱 (C) の 4 つの



気分尺度において、コラージュ表現前後で有為な変化，すなわちストレスの軽減があったということである（図5，表3）。

4名の中でも緊張-不安（T-A），疲労（F）の2項目において最大の変化があった学生Aのコラージュには，大切な家族であり大好きな飼い犬の写真が多数使われている（図6）。文字をどうしても描きたいと申し出たのもこの学生である。家族同様に愛おしい飼い犬を素材としたことが，2項目において特筆すべき効果をもたらした要因の一つにもなっていると推察されるが，コラージュ作品そのものの分析には未着手であるし，さらに後日同年齢の120名にも同様に実施したデータ解析もこれからである。これらは次の機会に検討したい。

今回このコラージュ表現前後の検査結果から，こうした表現活動行うことによって「ストレス緩和作用が得られるばかりでなく，自我状態にも飾り気のない素直な気分，現実逃避からの回復，協調性や自主性などの自信に富んだ，一種のカタルシス効果を及ぼしている可能性」<sup>4)</sup>が確認された。

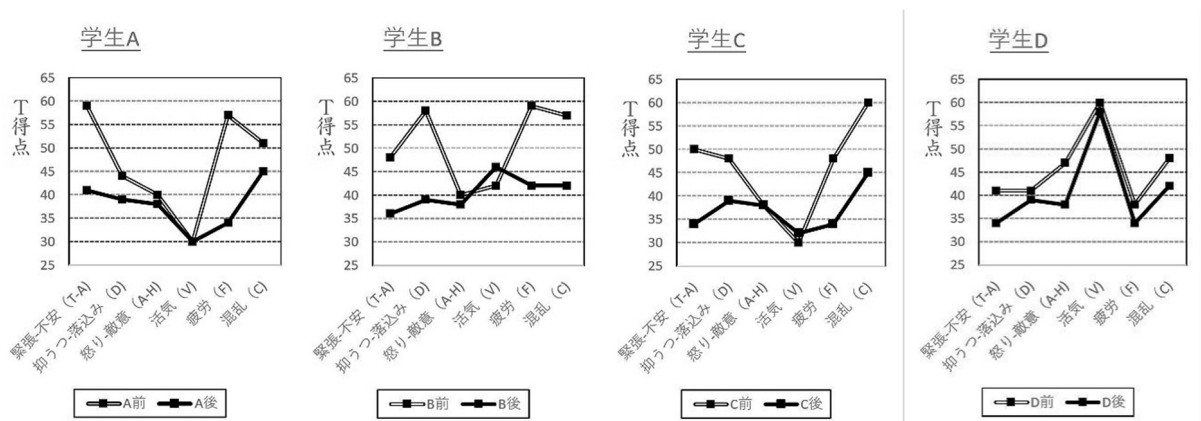


図4 コラージュ制作前後の気分の変化

表2 コラージュ制作前後の気分の変化

学生A	T得点	前	後	変化
緊張-不安 (T-A)	59	41	-18	
抑うつ-落込み (D)	44	39	-5	
怒り-敵意 (A-H)	40	38	-2	
活気 (V)	30	30	0	
疲労 (F)	57	34	-23	
混乱 (C)	51	45	-6	

学生B	T得点	前	後	変化
緊張-不安 (T-A)	48	36	-12	
抑うつ-落込み (D)	58	39	-19	
怒り-敵意 (A-H)	40	38	-2	
活気 (V)	42	46	4	
疲労 (F)	59	42	-17	
混乱 (C)	57	42	-15	

学生C	T得点	前	後	変化
緊張-不安 (T-A)	50	34	-16	
抑うつ-落込み (D)	48	39	-9	
怒り-敵意 (A-H)	38	38	0	
活気 (V)	30	32	2	
疲労 (F)	48	34	-14	
混乱 (C)	60	45	-15	

学生D	T得点	前	後	変化
緊張-不安 (T-A)	41	34	-7	
抑うつ-落込み (D)	41	39	-2	
怒り-敵意 (A-H)	47	38	-9	
活気 (V)	60	58	-2	
疲労 (F)	38	34	-4	
混乱 (C)	48	42	-6	

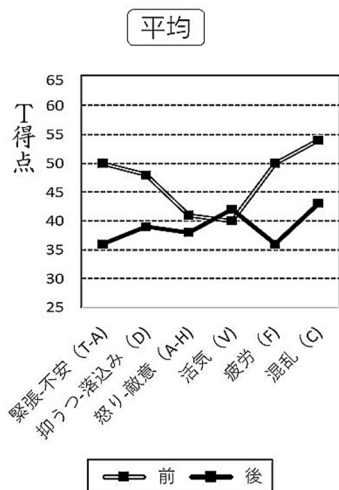


図5 コラージュ制作前後の気分の変化 (平均)



図6 学生Aのコラージュ (参考)

表3 コラージュ制作前後の気分の変化 (平均)

学生平均	T得点	前	後	変化
緊張-不安 (T-A)	50	36	-14	
抑うつ-落込み (D)	48	39	-9	
怒り-敵意 (A-H)	41	38	-3	
活気 (V)	40	42	2	
疲労 (F)	50	36	-14	
混乱 (C)	54	43	-11	

## 5. おわりに

筆者が2009年から継続して取り組んできた西宮市山口町船坂地区でのアートによる村おこしは、9年目にして節目を迎えている。アートが人に与える力、社会への影響力、その在り方自体が今全国での取り組みで問われている。その最中、この船坂の児童養護施設善照学園にアーティストが入り続けている。アートの効果を確認する切り口が、この善照学園に見出せるのではないかと考え、まずは児童養護施設における芸術表現のパイオニアともいえる愛媛県今治市のあすなろ学園を含めて概観した。

「自己表現」に着目することで教育・養育は全うできるとする考え方は、あすなろ学園でも善照学園でも共通していた。表現を通して児童は生きる術を身に付けていくのである。しかし芸術表現によってどの程度達成効率が上がったのかということについては、客観的な数値では測りにくく、主観的な推測とならざるを得ない。

そこで、医療分野の芸術療法として広く浸透しているコラージュ療法、そしてそれを芸術表現と見立ててその効果について測定する手段として J-POMS 短縮版を援用した。実際の施設児童に実施する状況にはまだないために、疑似的に本学学生に施した。その結果、先行する研究報告と同様に、こうした表現活動を行うことによるストレス緩和作用に加えて、抑圧されていた感情の解放や浄化作用の可能性が確認された。またそれが、教育・養育の大きな助けとなるであろうことは想像に難くない。

以上を手掛かりに、今後はさらにデータを集めて分析を行い、各地の施設の地域性や背景も鑑み比較検討しながら、アーティストが児童養護施設にいる意義を客観的に明らかにしていきたい。また、鈴木と同様に船坂での実践者としても、今後も継続的に船坂地区を応援していきたいと考えている。船坂文芸サークルの展覧会企画の運営や広報面、船坂里山学校（旧船坂小学校）内展示室の運用などのサポート、さらに表現活動を中心としたワークショップの定期開催などを、船坂の担当委員の方々と検討している。そこに本学学生や善照学園生が関わることで、さらに彩りが増すことにもなる。善照寺の寺子屋をルーツとする古き学び舎（旧船坂小学校）が残る船坂は、アートを媒介に次世代の学びと成長の場として一歩を踏み出したところである。

## 注・引用文献

(1)梶原淳一『冬のすずめたち』愛媛新聞社, 2005,p.157

(2)前掲書

(3)徳永民平・石川猛『あすなろの風たち』社会福祉法人コイノニア協会養護施設あすなろ学園, 1986,p.173

(4)近喰ふじ子「コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果—日本版 POMS とエゴグラムからの検討—」『日本芸術療法学会誌』31(2),2000,p.74

## 参考文献

徳永民平・石川猛『あすなろの風たち』社会福祉法人コイノニア協会養護施設あすなろ学園, 1986

梶原淳一『冬のすずめたち』愛媛新聞社, 2005

横山和仁『POMS 短縮版 手引と事例解説』金子書房,2005

杉山洋・和田直熙「心を表現する—絵画と詩作の現場—」『児童養護』37(2),2008,pp.39-42

高畑和子・金丸隆太「児童養護施設で暮らす小学生のコラージュ表現」『茨城大学教育実践研究』30,2011,pp.303-315

三谷英子「児童養護施設におけるアートワークを通じた支援」『青山学院大学教育学会紀要教育研究』56,2012, pp.35-48

近喰ふじ子「コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果—日本版 POMS とエゴグラムからの検討—」『日本芸術療法学会誌』31(2),2000,pp.66-75

塚本千秋「コラージュ療法の実践過程についての覚え書き」『岡山大学教育実践総合センター紀要』7,2007,pp.145-155

保坂遊・音山若穂「臨床美術による表現活動が児童養護施設入所児童に与える効果について」『保育学研究』54(2),2016,pp.95-106

伊藤留美「アートセラピーと美術教育についての一考察」『人間関係研究』南山大学 13,pp.139-152,2014

甲南大学人間科学研究所調査報告書『アートセラピーの現状と課題—アンケートとインタビューから』2012

岡田珠江「小学校における心理療法を適用した心理教育的アプローチ—<お絵かき遊び>の試行と成果—」『日本芸術療法学会誌』40(1),2009,pp.43-51

中西学「船坂住民数珠つなぎ」『船坂新聞』82,2015,P.3

## 謝辞

貴重な時間を割いて聞き取りに協力いただいた善照学園松本義博園長、そして現代美術家鈴木貴博氏に感謝の意を表します。絶版であり入手に困難を極めた『あすなろの風たち』を贈呈いただいたあすなろ学園梶原淳一園長には、感謝の念にたえません。本当にありがとうございました。